飽きずに続ける反復練習

「教育とは、親のわが子に対する本能的ないとなみである」と私は言いました。つまり、親の立場から行なうものが“教育”であって、これを子供の立場から言いますと“学習”ということになると思います。“学習”という言葉は“勉強”という言葉と同じ意味のように使われていますが、これほど違ったものはありません。子供は“学習”が大好きですが“勉強”は大嫌いです。この“学習”と“勉強”の違いをよく明らかにしておく必要があると思います。

“学習”という言葉は、孔子の『学んで時にこれを習う』に由来するもので、二千年にわたる由緒の深い言葉です。“学”はわが国では“まなぶ”と読みますが、これは古くは“まねぶ”と言い、今の“まね（真似）る”ことを意味した言葉です。

立派な人の言行に触れて「ああすばらしいなあ」と思い、「自分もあのようになりたい」と願い、その言行を真似ることが“まなぶ”ということの本義です。それは、言わば人間の本能と言うべきものであって、だから、それが最も純粋に発揮されているのが幼児だと思います。

幼児は、大人の言うこと、なすことを実によくとらえ、実に見事に真似ます。そして、それを飽きずにくり返して、やめることをしません。これが「学んでこれを習う」の“習う”ことなのです。

“ならう〃とは“な（慣）る”という古語の延びたもので、それは今の“慣れる”という言葉と同系の言葉です。『習うよりも慣れろ』という諺がありますが、実は、習うことは、元来“慣れる”ことを意味した言葉であって、だから“習慣”という熟語があるわけです。

同じ事をくり返しくり返しやっていますと、それに慣れて、むずかしいこともやさしく出来るようになり、努力しないでもうまく出来るようになります。それを“習う”というのですが、幼児の生活を見ていますと、実際、同じことをくり返しても決して飽きることのないことが判ります。

大人の目から見ると、実に単純なつまらないと思われるようなことを、いつまでもくり返しくり返し反復して、一向にやめる気配がないのをよく見ることがあると思います。そのように反復練習するので、それが身についてまるでそれが本性であるかのようになるのです。

「習い性となる」とか、「習慣は第二の天性である」とか言われているゆえんです。

幼児は、このように、真似ること（学ぶ）と、くり返すこと（習う）とが実に好きなように生まれついているのですから、幼児はだれでも生まれつき“学習好き”だということが出来ます。それで「好きこそ物の上手なれ」というわけで、自然と物事に上達し、能力が養われるのです。